
双子星

S e y R a i n

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双子星

【Nコード】

N3905D

【作者名】

Sey Rain

【あらすじ】

人類は宇宙に居を求めて進出し始めていた。ある日観測していると折しも、二つの星を発見する。早速、人類が居住できる条件が整っているのかを調査する為に宇宙船は出発するが……

第1話

人類は宇宙に向かって久しく、人工の星を造り、今や地球以外の星にも積極的に進出していた。

まず、観測所でそれらしき星を発見すると基地から無人探査船を差し向け、人類が住める状態であるかを画像やデータを詳しく送らせるのである。

かくして、データが出揃い、人類が住むに耐え得ると判断されるとき、いよいよ有人の調査隊が目的の星へと向かうのだった。そしてなお、詳細な調査が行われてから、一般の入植希望者が移民して開拓するのである。こうして、今日までに多くの星々に人類は入植し、その数を着実に増やしていった。

ある日のこと、偶然にも二つの星が発見された。その二つはくっ付きそうなほど距離が近く並ぶように位置していた。そこで、さっそく無人探査船を一度に二台同時に打ち上げて、一台は左側の星へ、もう一台は右側の星を探索させようとした。

ところが、重力の影響だろうか予定とは違って、まるで吸い込まれるように二台共に左側の星に着陸してしまったのだ。仕方なく左側の星を探索してみたところ、人類が住むには申し分のないほどの条件が揃っていた。データの中には、生物らしき存在を示す画像まで送られて来たのだ。

しかし、右側の星も探索しなくてはならない。もしかしたら、人類を脅かす文明が存在するかもしれないからだ。そこで、右側の星を再探査するべく、また無人探査船が打ち上げられた。

だが、その探査船もまた左側の星へ吸い寄せられるように右側の星には着陸が出来なかった。エンジンの出力を変えたり、軌道を変えたりしてみたが、現在の科学力では、右側の星に辿り着かせることは非常に困難であるといえた。それでも、幾度となく失敗を重ねながらも、人類は諦めずに挑戦を続けた。

そして、奇跡的と言ってもよいほどの確率の中、ついに右側の星へ探査船を着陸させることに成功したのだ。

早速、探査を開始してデータを分析すると、そのデータのほとんどは左側の星と一緒にだったのだ。基地の一人がそれを比べてこう言った。

「まるで双子のような星達だな」

それが伝え広まり、誰が言うでもなしに、左側の星の方が少しばかり大きかったので兄星。右側の星を弟星と呼ぶようになった。

いよいよ、なんとか無事に無人探査を終えたので、今度は有人での調査が行われることになった。左側の兄星に向かう隊員はすぐに決まった。しかし、右側の弟星に着陸できたのは奇跡的といってもよいくらいだったので、我こそはという者を募って人選が行われ、男女を問わず勇猛果敢な精鋭隊員が乗り込むこととなった。

こうして準備も整い、二台の調査船はそれぞれの目的の星に向けて出発した。二台共、なんとかそれぞれの星に到着できたように見えた。

しかし、いくら待ってもどちらの調査船からも基地に連絡が入ることはなかった。しびれを切らせて、何度か基地からも交信を試みたが連絡はとれない。元々、無人探査の時から着陸に困難を極めたのだから、着陸する時に不測の事態が起こって調査船が故障したのかもしれない。或るいは交信装置が故障したのかもしれないと思い、調査隊からの連絡を待ったが、ひと月経っても連絡は途絶えたままだった。

しかし、安否を確認する為に差し向ける宇宙船はすぐには用意出来なかった。何故なら、今の科学力では同じ性能の宇宙船しか無いからだ。

もし、すぐに宇宙船を打ち上げても、また同じことになる可能性が非常に高いと誰もが思ったからだった。

基地からの交信は定期的に幾度となく試みられたが、何の応答もないままであった。その為、ついにこの双子星への入植は見合わせ

られることになったのである。

第2話

月日は流れ、十数年経ったある日、ついに新型の宇宙船が開発された。どの科学者や技術者も口を揃えて、新型の宇宙船の素晴らしさを語るのである。

そこで再び、双子星に対する計画が持ち上がったのである。以前の失敗した時の記憶を思い出す人も少なからずいたので、念のために無人探査船を改めて打ち上げて探査してみると、双子星のどちらにも文明らしき痕跡が見つかったのである。すると、一人の科学者が、

「もしかしたら、前の調査隊員が生存しているかもしれないぞ」と言つと、それを聞いた他の者達もその可能性は大いにあると口々に騒ぎ出した。

そこで、今回の計画が議論されようやく一つの案がまとまった。その計画とは、まず一台を比較的に着陸し易いと思われる左側の兄星に向けて打ち上げ、調査を行った後に右側にある弟星に向かうというものだった。その任務に就く隊員も男女織り交ぜて優秀な者達を選ばれた。

今回の計画では、二台の宇宙船が用意されたが、不測の事態に備えて一台を待機させて、万が一の場合には救助に向えるように万全の体制で臨むことになった。

かくして、新型の宇宙船は一路、兄星に向けて旅立ったのである。船内の隊員達の士気も意気揚々であった。地球の基地を出発してからどれくらいの月日が流れただろう。なにしろ、目標の兄星までの道程は遠いのだ。隊員達は自動操縦に切り替えて、二人が監視を務め残りの者達は休息とり、それを交代制で日々を過ごしていた。

航海は順調に進み、そしてついに目指す兄星が間近に迫ってきた。監視していた隊員は休息している残りの隊員達全てを起こすと、全員がそれぞれの配置に付き、いよいよ着陸の準備に入った。着陸す

る地点は、以前無人探査船の送ってきたデータから平面になっている地点にセットしてある。あとは着陸するのを待つばかりである。もし、自動での操縦で難航するようであれば、直ちに手動に切り替えての着陸を試みるつもりで全員が息を押し殺していた。

ところが、意外なほどあっさりと着陸できたのだ。隊員達もまずは、ほっと一息してすぐに地球に着陸した旨を連絡した。

一方、地球の基地では着陸に成功したとの知らせに、さすがに新型の宇宙船であるから、十数年前の物とは比較にならない性能が証明されたと科学者や技術者達は誇るように歓喜した。

だが、まだ着陸しただけのことである。データによれば文明らしき痕跡が見られた訳だから、隊員達は武器を持ち用心しながら船外に固まるようにして出てみた。どうやらこの場所には、生物はいないらしい。データから作成した地図を広げて、とりあえず文明の痕跡の写っていた場所まで移動することになった。

移動には、この日の為に開発された特殊な車両を使って進んだ。その間近までくると何やら人影らしきものが動いているのを遠方から発見することができた。その人影らしき者もどうやらこちらに気付いたようだ。

しかし、警戒するような素振りは見せずに、むしろ向こうから近づいて来る。隊員達は更に警戒しながら少しずつその距離を縮めていった。

やがて、その人影をはつきりと目視できる距離まで近づくと、相手はしきりとこちらに向かって手を振っている。もしかしたら、十数年前の隊員ではないかと眼を凝らしたが、その姿かたちは地球に生息しているゴリラやオラウータンに似ていた。ただ異なっている点は、きちんと二足歩行をしている点だった。

暫く様子を見ようとそこに停止していると、その生き物は次々と現れてなにやら話しかけてきた。それは、地球上で使われる共通言語に非常によく似ており、話の内容も大体が理解できた。

その話の内容とは、こういうものだった。

「あなた達も天からやって来たの方々のようですね。以前にも天からあなた達のようにやって来た方々がおりました。そのおかげで私達の暮らしは一変しました。それまで、地面に手を着いて歩いていたら私どもは足だけで歩いている姿に驚いたのです。

そして、その空いている手に道具を持って移動していることに感心したのです。そうすれば多くの物を運んだり、色々な作業をすることができるようになりました。

それから、火を自在に起こす方法も教わりました。それまで生で食べていた為に、病気になる者が多かったのですが、火で料理するということを覚えたおかげで、病気になる者はめっきりと減ったのです。

それらを真似することで私達の文明は飛躍的に進歩を遂げました。それはもう、感謝してもしきれないほどにです。ですから、あなた達も歓迎します」

と、大よそこんな感じのことであつた。

第3話

どうやら敵意は無いようなので、更に近づいてこちらからも話しかけてみた。

「今、あなたの言った方々はまだ生きていますか。もし、生きているのであれば是非会いたいのです」

すると、一匹いや一人がまた話かけてきた。

「生きているも何も、今ではこの星の救世主として皆で崇めております」

それを聞いて、隊員達は皆で喜んだ。地球にいるほとんどが口では生存しているの可能性もあると言ってはいたが、実は諦めていたからだ。その証拠に葬儀を行った家族もあるくらいなのだから。

前の隊員達が無事でいることを、まず確認したいと思い、集まった者達に案内をお願いしてみた。すると、快く承諾してくれてその場所まで一緒に付き添ってくれたのである。その場所を地図で確認すると、それは文明の痕跡のあった場所に相違なかったのである。

しばらくして、隊員達の前には十数年前に消息を絶った隊員達が現れて、対面を果たした。

「よくぞご無事で。しかし、連絡が無かったのはどういう訳だったのです」

すると、消息不明になっていた隊員の一人が

「実は、此処に着陸した際に宇宙船が故障してしまったのだよ。私達も怪我を負い死に行くばかりと思っていたところにも、この者達が駆けつけてくれ手当をしてくれたのだ。そして、今こうして此処にいるという訳だよ」

「では、地球でも家族の方々が心配しておりましたので、さっそく地球に無事を連絡しましょう」

そう言って一人の隊員は宇宙船まで戻り、前隊員達の無事を地球の基地に報告した。地球の基地にいた者達から、どっと歓声が上がっ

た。その報は家族にもすぐに伝えられ、亡くなったものと諦めていた者も拳つて基地に駆けつけた。

そして、生存している証拠として、隊員達と話がしたいと言いつたのだ。それについては、宇宙船と現在彼らのいる場所とは距離が離れていてすぐには無理であることを告げた。

また、簡単な伝言であればそれを彼らに伝えたと約束した。その伝言の内容はほとんど一緒に、今元気に過ごしているのかと、安否を気遣うものがほとんどだった。それについては、今自分がこの目で見てきたら大丈夫だと答えた。それによって家族が生きていたと知っただけでも活気を取り戻したことは声でわかった。

連絡を済ませた隊員が皆の集まっている場所に帰ると、更にこの星の住民は増えてきていた。どうやら、その隊員が宇宙船を往復する間に、他の隊員達にこの星で採れた食物などを持ち寄って歓待してくれていたというのである。

「では、皆さんを我々の街にご案内します」

そう族長らしき者が言うのとそれに従うように他の者達も歩き始めた。その後について行くとほどなく、この星の中心地に到着した。

街並みには地球のものと比べるべくもないが、様々な建築物が建ち並び立派な文明の証がそこにあった。郊外には、菜園や田畑まであるという。

族長らしき者が口を開き、

「これらは全て、天からいらした前の方々から指導を受けたおかげで築き上げられたのです。それまでの私どもの生活は野生した木の実や果物を、或いは獣を狩猟してその場で食事をするというものだったのです。しかし、今や食糧の心配もせず、野獣に襲われる危機からも脱することができました。本当に感謝しております。

あなた方はこの星に新たに住み移る者達のために調査に来たとも聞いておりますが、あなた達のような方々が多く来られることはこの星にとっても、喜ばしい限りです。いつでも歓迎するとお伝えください」

そう言つて、隊員達にお礼を述べた。

調査隊はあらかたのことを見聞し、調査目的も終えたので次の弟星を目指すことにした。その際に、先着隊のメンバーにも一緒に来るかを訪ねた。

すると、いずれ来るであろう入植者の為に残るという者と地球に残してきた家族に会いたいので共に連れて行つて欲しいという者に分かれた。

そこで、後者の者達を宇宙船に同乗させることを地球の基地に連絡した。基地からの指示もそれで良いとのことであつたので即座に決定をみた。

こうして、星じゅうの歓迎を受け過ごすうちに、出発する日がきた。帰りたいと言つた者を加えた一行は、弟星に向けて旅立ったのである。

第4話

兄星の重力を脱した宇宙船は弟星の軌道に乗り、そこから何周かしながら、着陸するのに適した地点とその為の進入角度や速度を割り出した。そのデータを宇宙船にセットして自動操縦に切り替えて弟星への突入に備えた。

ほどなくして、宇宙船はセットされた地点に達すると、徐々に角度を変えて弟星に突入を開始した。

十数年前に幾度となく人類を拒むように人類の進出を阻んできたこの星も、今回は以外な程すんなりとその進入を許し、宇宙船は大気圏に入ると減速を始め、やがて地上へと着陸したのである。

隊員達も、その順調さに拍子抜けしてしまう程だった。兄星に長年留まっていた隊員が、

「科学の進歩には目覚ましいものがあるな。私達の乗ってきた宇宙船などは、兄星でさえ着陸に難航して故障してしまったのに……」

そう言われると、他の隊員達も科学者から聞いていた性能の違いを改めて実感したのだった。

科学者達が言うには、この宇宙船と旧型の宇宙船とを比較すると、エンジンの出力は二倍になり、燃費や耐久性も向上したので旧型は地球と双子星のどちらかとを往復するのが限界であったのに対し、新型は地球と双子星のどちらかを二往復してもなお、余力があるのだと口を揃えていた。

実際に兄星に難なく着陸し、そこからまた自力で飛び立って、こうして困難と思われた弟星にも無事に着陸することができたのだから。

そのことに感心していると一人の隊員が、はたと気づいたように、「無事に着陸できたことを地球の基地に報告しなくては」

そう言って交信機で報告すると共に、弟星の調査指令を受けた。

隊員達は、早速無人探査船のデータを基に作成された地図を映し

だして、現在の自分達の着陸した地点と、文明の痕跡らしき物が確認された場所との距離を測ってみた。どうやら、徒歩での移動にはやや距離があり過ぎるようだ。

そこで、今回も兄星で用いた特殊車両で移動することになった。隊員達は車に乗り込むと、目的地を目指しながらも慎重に進み始めた。辺りを注意深く観察していると、目的地の方向に何やら人影らしき物が見えてきた。

しかし、その人影らしき物は兄星の時のように近づいてくる気配がない。だが、逃げるといふ様子もなく、唯じつと其処に居座って動かない。こちらから不用意に近づくと、攻撃してこないとも限らない。そこで、車に搭載されているカメラでその周辺を拡大して見てみた。

モニターに映し出されたのは、兄星で見たゴリラやオラウータンに似た生物とそっくりだった。

「この星にも兄星と同じ種族が住んでいたのか。それならきっと、友好的に我々を迎え入れてくれるに違いない」

そう、兄星にいた隊員が言った。

そこで、人影のいる場所まで車を移動させ、相手が逃げないことを確認してからマイクを使って、兄星で用いられていた言葉で話しかけてみた。

「こんにちは、私達は地球と言う星からやって来た者です。以前にも私達の仲間が来たと思うのですが、今はどうしているでしょうか？」

その相手は、ギョツとした表情をしてこちらを見つめ、固まったように動かないでいた。どうやら、この特殊車両が喋っているものと勘違いをしているようだ。

隊員達は、自分達の姿を見せた方が安心するのではと思い、万が一に備えて簡単な武器を身に付けて車の外に出た。

相手も安心したのか、すぐ間近まで近づいても攻撃してくることもなく、逃げることもしないで、待っていたように

「なんだ、以前やって来た連中と本当に同じようだな。二本の足だけで歩いてる。しかし、その動いたり声を出す大きな物体は何なんだ。前に来た奴らはそんな物に入って来なかったぞ」

「では、以前此処に私達の仲間が来たんですね。今も生きていますか？」

「生きているも何も、今では我らと一緒に暮らしている」

十数年前に消息を絶った隊員達が無事していると聞くと全員で喜び合い、隊員の一人がすぐ話を続けた。

「彼らは、どうやって来たのですか？ それと是非、あなた達の暮らしているところまで私達を案内しては貰えないでしょうか」

「どうやって来たかだって？ 歩いて来たに決まっているだろう」。

お前達と同じように二本の足で、そうやってヒョコヒョコとな。

それと、一緒に連れて行くのは構わないが、その後のことは族長が決めることだからな」

「では、一緒に連れて行って下さい」

その返事を聞くと、弟星の生物は黙って先に歩き出した。

第5話

それを見て、隊員達は驚いた。特に驚いたのは兄星に留まっていた隊員達で、

「移動するのに手をついている。我々が兄星に辿り着いた時の状態と同じだ。我々の仲間と一緒に暮らしていると言っていたのに、少しも進歩していないなんてどういうことだ」

兄星に留まっていた隊員の一人が言うと、別の隊員が

「いや、彼らはたまたま以前の癖が出たんだろう。我々人類だって、一度に全ての者が新しいことに習った訳ではないし、何しろ人類が来てから十数年しか経っていないのだから彼のように、つい昔の癖が出てしまう者もいるんだろう」

その隊員の意見に皆納得し、取り敢えずその彼の後を追った。

細い獣道をしばらく進むと、谷合いに出た。そこには、大勢の彼と同じ姿をした者達が集まっていた。そのさまは、兄星で見かけた集落というより、むしろ群れと呼んだ方が近い感じがした。

その集団のところに着くと、おもむろに

「着いたぞ。今、族長に伝えてくるから此処で大人しく待っている」
そう言い残して、彼の姿は奥の方に消えた。

隊員達は、そこで待つ間に彼の仲間の行動を眺めて暇を潰していたが、彼らは誰一人として二足歩行をせず、手について移動していることに驚いた。

「どういうことだ！ 彼だけでなく、皆手について移動していぞ」

「それに生肉をそのまま食べているし、とても兄星と同じ種族とは思えない」

「どちらにも我々人類がやって来たはずなのに、この差はどういうことだ」

そう隊員達が口々に話していると、先ほど奥に消えた彼と数名の者がやって来た。その中には、十数年前に消息を絶ったと思われる

隊員の姿もあった。

しかし、その隊員達も手をついて歩いて来たのだ。驚いて、どうしてそんな格好をしているのかを尋ねると、その内の一人の隊員が話し出した。

「我々の乗った宇宙船は、何とかこの星の軌道に乗ることに成功した。だが、大気圏に突入すると重力が強く、エンジンの出力を最大にしても思っていたよりも減速出来ずに落下するようにして、地表に落下してしまったのさ。」

その為に宇宙船は酷い損傷を受けて故障してしまったが、幸いにして命だけは助かった。地球に助けを求めようにも交信機までもが壊れていて、それも無理だった。

仕方なく外に出て、さ迷っていたところに彼らと遭遇し、話しかけられたのだ。言葉は、我々の用いる言語とよく似ていたので理解することができた。

彼らは、我々が何処から来たのか、どうしてそんな格好をしているのかと色々と質問を浴びせてきた。そして、こちらが答える暇も与えずに、二本の足だけで歩くのは変だと言ってきた。

そうこうしている間に、この族長のいるところまで我々は連れていかれた。丁度、今の君達のようにね」

そこまで話すと、それまで黙って聞いていた族長らしき者が遮るように、話に割って入ってきた。

「この物共に対して、我らは友好的に接してやったのだ。ところが、ある日怪しき術を用いて火を起こし、与えた食べ物を焼き払ったばかりか、その火で我らの仲間にも大怪我を負わせたのだ。」

いくら寛大な我らでも許し難いことであつたが、今後は我らと同じように過ごすならばという条件で許してやった訳だ。

ところが、こいつらは相変わらず我らに馴染もうとせず、危なっかしく二本の足だけで歩いておるではないか。それを真似する者が出て、仲間がまた怪我でもしたら大変なことになる。そこで、歩き方も我らのようにするように命じたのだ」

すると、族長の後ろに従うようにしていた隊員の一人が、また口を開いた。

「違うんだ。全ては誤解なんだ。彼らのくれた食べ物とは、生肉だったんだ。さすがにそれをそのまま食べる気にはなれなかった。」

そこで、枯れ枝と草を探して、どうにか火を起こしたんだ。その上で肉を焙っている、やがて香ばしい匂いが立ち始めた。

すると、彼らの仲間のうち一人がやって来て、何をしているのか尋ねたので、肉を焼いて食べるのだと答えたんだ。そして火を起こすにはどうすればよいのかと、また尋ねられた。

そこで一緒に説明しながら火を起こしたんだが、何を思ったのかそいつは火の中に手を入れてしまったんだ。何しろ見ての通り、彼らは全身に毛皮を着ているようなものだから、たちまち火は彼の体に燃え移り、全身に広がった。私達は、急いで彼の体に砂を掛けたり、転がして火を消そうとした。

そのうち、彼の仲間が集まりだして、私達が彼を焼き殺そうとしていると騒ぎ出したんだ。そこに丁度、この族長が現れたので事の経緯を説明したんだが、信じて貰えなかった。

一時期は捕えられて、我々が殺されかけたんだが、先ほど話に出てきた条件を受け入れることで、ようやく一命は取りとめ許されたということなんだ。

今では、彼らと同じように生肉を食べ、手について歩いているという訳さ。もう、十年以上もそうしてきたから慣れたがね」

そう言つて、半ば諦め顔をして話を続けた。

「ところで、君達はこの星にどうやって来たんだい？ 君達も不時着したのかい？」

その質問には、隊員のリーダーが答えた。

「いいえ違います。我々人類は、この弟星にも無事に着陸できる性能を持った新型の宇宙船の開発に成功したのです。そして、再度この星の調査とあなた方の安否を確認する為に、こうしてやって来たのです」

「本当か！ それならば、お願いだから一刻も早く私達を地球に連れて帰ってくれ。そうすれば、もうこんな格好をさせられながら暮らさなくても済む」

先ほどまで、うな垂れて諦めきっていた顔と眼が、輝き出した。

第6話

その表情を見て、隊員の一人が言った。

「皮肉なもんだな。双子星の両方に同じ種族が生息していたのに、兄星では地球の文明を受け入れて進歩し、崇められていたのに対して、こちらの弟星では地球の文明を拒んで未だに原始的な生活を送り、従属させられていたなんて」

それを聞いた弟星の族長が、

「なんだと！ 向こうの星にも我らと同じ者達がいるというのか。しかも、お前たちの文明とやらを受け入れて、我らよりも進んだ生活をしておるだ。そんなことは信じられん。もし本当なら、その証拠を見せてみる」

と、凄い剣幕でまくし立てた。

確かに、話を聞かされただけでは信じられなくても当然だろうということになり、兄星で記録してきた映像を見せてみるようになった。

一方で、今までこの星で従属させられて暮らしてきた隊員達は、一刻も早く地球に帰りたいとせがんだ。しかし、全員を宇宙船に乗せると定員をオーバーしてしまう。

どちらにしても、一度宇宙船に戻り、地球の基地に報告をして指示を仰いだ方が良さだろうとリーダーは判断した。

そこで、一行は族長と自分も一緒に行きたいと願い出た若者一名を加えて、まず特殊車両のある地点まで行き、そこから宇宙船に向かうことになった。

特殊車両のあるところまで来ると、その物体を目の当たりにして族長と若者は驚いた様子で、これは何かを尋ねた。隊員達は説明しても、わからないだろうと車内に二人を招き入れた。そして二人を乗せたまま、宇宙船に向かって進み始めた。

族長は自分達が動いていないのに周りの風景が動いてゆくので、

少し怯えた様子で固まってしまっているように身動きひとつせずだったが、一緒に来た若者はむしろ未知の物に対して目を輝かせているように見えた。

暫くして宇宙船が見えてきた。陽に反射して輝き、近づくにつれ岩山のようにそびえ立つ巨大な物体に、隊員以外の二人は茫然と眺めているばかりだった。

到着すると、特殊車両を降りて船内に入るようにと二人を促してその前後ろを隊員達が挟み込むようにして宇宙船の中に入っていた。

隊員達のリーダーは、地球の基地に交信機で連絡をとり、弟星で消息を絶っていた隊員達も全員無事であることと、全員を宇宙船に収容して帰還するには定員を超過してしまうことを報告した。

地球からの回答は、もう一台の宇宙船を弟星に向かわせるとの回答だった。もう一台の宇宙船がこの星に到着するまでには、日にかかる。

そこで、到着するまでの間を宇宙船で過ごすことにした。その間、一人の隊員に、先ほどから押し黙っている族長と若者に、兄星での様子を撮影してきた映像を見せるように指示を出した。

隊員がパネルに組み込まれた装置を操作すると、静まり返っていた船内の前面の壁に映像と共に音が響き渡った。

族長と若者は、飛び上らんばかりにビクツとしたが、すぐに眼の前に広がった光景に食い入るように見入っていた。そこには、兄星での映像が映し出されていた。見たこともない建築物が表れたかと思うと、自分達と同じ姿をした者がそこから出てきた。

そして、その者の後を追うように映像が動いてゆく。やがて、その者は火を起こした。火を起こすことを怪しげな術と思いこみ、実際に見たことのなかった族長は、木と木を激しく擦り合わせることで発火する様子を見て、

「おお、何も無いところから火を出しおった。こうして火を起こしていたのか」

呟くと、少し納得した様子だった。

次に、火の上に平らな石を置き、肉と草のような物と木の実を使い料理を始めると、料理するということを知らない族長がまた、

「火の上に石を置いて、今度は何をしておるのだ？」

と、げげんそうな表情で聞いた。

「あれは火の熱を石に伝えて、その熱を使って肉を焼いたり野菜や木の実を炒めているのです。そうすると味も良くなるし、病気になる虫なども死んでしまいますから」

族長は相変わらず信じ難いというような表情をしているが、若者は関心しているようで熱のこもった眼差しで見入っている。

映像の中の者は、料理が終わったらしく火を砂をかけて消した。

ここで、従属させられていた隊員が声を上げた。

「ほら、あの時の私達もこうやって火を消そうとしていたんだ。これで私達が彼を殺そうとしたのではなく、助けようとしていたことがわかっただろう！」

そう言われて、族長は少し気まずい表情を見せたが、黙ったままだった。

火を消し終わると、建物の中に入って行っただと思うと、今度は器のような物を持ってまた外に出てきた。そして、手には器を重ねて持ったまま、料理していた場所まで二本足で歩いて戻って来て、料理を盛り付けた。

それを見て二人は驚いているようだが、族長と若者では若干その反応したところが違ったようだ。族長は、

「あの手に持つている物はなんだ？」

と、聞き返した。

「あれは土を水で練ってから形を作って、それを焼き固めた物です。色々な形を自在に作れるので水を溜めておく物から、ああやって料理を盛り付ける物まで作れるのです」

リーダーが答えると、今度は若者が

「土からあんな物まで作れるのも凄いが、手に物を持ったまま歩い

ている。我らのように手をついた歩き方では、あんなに大量には運べない。それに土から出来た物なら手をついた途端に衝撃で壊れてしまっだろう」

と、二足歩行に対する利点に気付いたようで、しきりに感心しているようだった。

そう言われると、族長もそのことを認めない訳にもいかないらしく、

「うむむ」

と唸った後に、また黙り込んでしまった。

リーダーは、この辺で映像を見せるのは良いだろうと思い二人に尋ねた。

「これが向こう側の星に住んでする種族と生活様式です。あなた達と同じ姿形をしている種族がいるのです。彼らも我々の前にやって来た仲間達が来るまでは、あなた達と同じ生活をしていたそうですよ。それが彼らは我々の知恵を受け入れて、あのように歩き方や生活まで変わったのです。どうですか、彼らのように我々を受け入れて、共により良い生活を築上げて行こうという気はありませんか？」

すると、族長がそれに対して答えた。

「これは、お前達がまた怪しげな術で我らを騙そうとしておるのだろう。こんなまやかしを見せて、信じると思っているのか。もし、本当に向こうの星にも我らと同じ仲間がいるというなら、そこに連れて行つて直接話をさせてみる！」

族長がそう言うのと、先ほどまで関心を示していた若者までが直接会うまでは信じられないと言い出した。

リーダーもそこまで言われると、彼らを兄星に連れて行かなくては納得しないだろうと考え、地球の基地に彼らの要望を伝え、計画の変更を提案した。

その計画とは、この宇宙船で兄星と弟星にいた隊員達を地球に帰還させ、こちらに向かっている宇宙船に乗り換えて、族長と若者を

兄星まで連れて行き、再びこの弟星に戻ってから地球に帰還するという計画である。地球の基地もその計画を了承した。

迎えの宇宙船がやって来るまでの間の数日は、船内に保管してある宇宙食でお腹を満たした。族長と若者は、初めて見るその食糧に警戒してなかなか食べようとはしなかったが、隊員達が平気で口に頬張るのを見たからなのか、背に腹は代えられないからなのかはわからないが、恐る恐る食べ始めた。

「なんだこの味は。今まで味わったことのない、何とも言えない不思議な味だ」

そう言つて、以降は文句も言わずに宇宙食を食べたのだった。

幾日かが過ぎた頃、轟音と共に空から一固まりの物体が落ちてくるのが見えた。やがて徐々に速度が緩やかになり、眼で確認できる地点に降り立った。

それは、待っていた宇宙船だった。地球の基地からも連絡があった。それは、もう一台の宇宙線が弟星に着陸したという知らせだった。

着陸した地点はそう遠くはなく、歩いて行ける距離だったので、地球に帰還したいと願う隊員達を残し、あとの隊員達は族長と若者を連れて、もう一台の宇宙船に向けて歩きだした。

もう一台の宇宙船に到着すると、ここまで操縦してきた隊員達と対面した。

「お待ちしていました。御苦労さまです。航海の途中で基地から連絡があったと思いますが、計画が少々変更になりました」

「聞いています。それで我々は、どうすれば良いのでしょうか？」

「到着してすぐで申し訳ないのですが、私達の乗って来た宇宙船が近くにありますので、それで地球に降りたがっている隊員達を連れて帰還してください。我々は、此処にいる残りの隊員達とこの弟星の二人を連れて、再び兄星に向いますから」

リーダーがそう言つと、到着したばかりの隊員達はこの周りを見まわし、この星の住人である族長と若者を興味深げに見つめた。

「この者達がこの弟星の者達ですね。なるほど、地球に送られてきた映像どおりだ」

「興味があるでしょうが、今は時間の余裕がありませんので地球に帰還したら、ゆっくりとデータや映像をご覧になってください。なにしろ向こうの宇宙船には、地球に帰ることを心待ちにしている者達がまっていますから」

リーダーは、その隊員達に自分達の乗って来た宇宙船の位置を告げると、早く向かうように促した。こうして機体の交換をしたのだ。船内で待機していると、地球の基地から連絡が入った。先ほど交代した隊員達が自分達の乗って来た宇宙船に到着し、これから地球に帰還することである。

「よし、これでひと安心だ。我々も兄星に向かおう。族長、あなたはこちらに座ってください。これから向こうの星に出発しますよ。着いたら直接、その目で確認してくださいよ。では、全員配置に就け！」

リーダーが号令を掛けると、直ちに隊員達は出発の準備を始めた。

「目標、兄星にセットしました。準備完了！」

「よし、これより兄星に向かう。エンジン点火。出発！」

宇宙船は、再び轟音を辺りに響かせて離陸し、兄星へと向けて旅立ったのである。

第7話

弟星から大気圏を脱するまで、宇宙船には物凄い重力がかかる。それを緩和する為に船内の気圧や重力を調節する装置が開発され、搭載されて今も稼働しているのだが、それでも通常のようにはない。

その重力は隊員達にとっては訓練されているので常識なのだが、この星から出たことのない族長と若者にとっては、初めての体験なので顔をしかめて必死に体にかかる重力に耐えている様子だったが、堪りかねて族長が口を開いた。

「なんだ、この押し潰されるような感覚は……」

「それは、この星の引力。つまり、この星が我々を引き付けている力のことですが、そのおかげで、皆空中に浮き上がらずに地面にくっついていられた訳です。その力によって、空間が曲げられてしまっているのです。」

それを上回る力を出さないと、我々はこの星の外には出られないのです。つまり、今この宇宙船は、この星の引き付ける力以上の力を出しているのです。その為に、押し潰されたような感じを受けているのですよ。」

もっとも、実際はもっと凄い力が働いているのですけど、この宇宙船にはそれを和らげる装置がついているので、こんな程度で済んでいるのですがね」

リーダーがそう説明しているうちに、どうやら大気圏を脱して宇宙空間に出たらしく、押し潰されるような感覚はしなくなった。族長達もほっとしたようで、モニターに映る画像を眺めてまた口を開いた。

「なんだか体が軽くなったようだ。それに今度は急に夜になっぞ」それを聞いたリーダーがまた説明を付け足すように言った。

「星の重力から脱して、宇宙空間に出たからですよ。星の周りには

大気があるのでお日様が見えている時は、その光を反射して明るいのです。夜はお日様が見えなくなるので暗くなるのです。

でも、此処の宇宙空間には大気がないので、お日様の光を反射しないから夜のように暗いという訳です」

族長達の表情を見ると、リーダーの説明のほとんどが理解できないことのように、それよりも今自分達がどうなっているのかを知りたいらしく、話よりもしきりに宇宙船の窓を覗いたりしていた。宇宙船の窓には、今飛び出してきた弟星が大きく見えていた。

それを見た族長がまたまた声を張り上げた。

「なんだ、あの大きな星は！」

「あれは、先ほどまで我々がいた星、つまりあなた達が暮らしていた星ですよ」

すると、族長も若者も大変驚いて、

「そんな筈はない。我らの暮らしていたところは平らだったではないか。それにあんなに大きくはないはずだ」

「大きいと地面からは丸いことに気付かないものですよ。それに、今大きく見えるのはまだ星の近くにいますからなんです。遠くの物は小さく見えるでしょう？ 向こうの星に近づけば、向こうの星の方が大きくなり、こちらの星が向こうの星と同じくらいの大きさに見えるようになりますよ」

と、リーダーが答えた。

しばらくするうちに、弟星は段々と小さくなって行き、代わって兄星が目の前に大きく見え出した。リーダーが言ったとおりになったのを見て、族長は唯その光景を黙って眺めているだけだった。若者はというと、リーダーに好奇の目を寄せているようだった。

やがて宇宙船は兄星の軌道に乗り、周回を始めた。リーダーが着陸の体制に入るようにと隊員達に指示を出した。そして族長達にも「もう少しで向こうの星に到着します。着陸の時に多少の衝撃がありますから、出発した時のようにしっかりと椅子に座ってベルトをしてください」

と、わかり易く言った。族長と若者は黙ってリーダーの指示に従った。

宇宙船は、徐々に角度を変えて兄星に突入を開始した。大気圏に入ると、エンジンが減速する為に稼働し、ゆっくりと兄星の地表に再び着陸したのだった。

着陸した地点は、以前に着陸した場所よりも兄星の種族の暮らす場所に近いところであった。これは、以前やって来た時のデータを補正してより近くに着陸地点を設定したからである。

リーダーは隊員達に宇宙船に損傷が無いかを確認させると、無事に到着したことを地球の基地に報告し、族長達にもそのことを告げた。

「さあ、到着しましたよ。ここからそう遠くない場所にあなた達と同じ種族の方々が我々の仲間と一緒に暮らしています。そこまで、一緒について来てください」

そう言い終えると、船内から出るように促した。

第8話

船内を出ると、族長達は辺りをきょろきょろと見回した。そこには、宇宙船の着陸した音を聞いて兄星の住人が早くも集まって来ていたのだ。自分達の暮らしていたところと景色が変わらないことや同じ姿をした者達に気付いて、

「なんだ、此処は宇宙船とやらに乗る前にいた我らのいたところではないか。その証拠に我らの仲間もいる。また怪しげな術で我らを欺いたな」

そう言った族長に、リーダーはこう言い返した。

「本当に此処があなた達の暮らしていた星だと思いますか？ 仲間と思っている者達を良く見てみなさい。みんな二本の足で立ったり、歩いたりしているでしょう」

そう言われると、確かにどことなく様子が変であることに気付いたようだ。

そうこうしていると、兄星の族長が残った隊員達と一緒に姿を現すと、

「おや、随分とお早いお着きですね。もう地球から新しい人達を連れていらつしゃったのですか？」

「いや、まだ地球には帰っていないのですよ。実は、此処から我々の弟星と呼んでいる向こうの星にやはり、調査と消息を絶った仲間を探しに行くことはお話しましたね。その弟星に着いてみると驚くことに、あなた方と同じ種族の方達が暮らしていたのです。そして、我々の仲間も無事に生きていました。

ですが、その種族の方々は我々のことを信用してくれないのです。そこで、あなた方の話をする、自分達の目で見るとは信じられないと言っているのです。此処にその方々の代表をお連れしたのです」

リーダーはそう言って、弟星の族長達の方を見た。

その視線を伝うように、同じく兄星の族長もそちらの方に目をやった。すると、そこには、自分達と確かに同じ姿をした者が二人いるではないか。

「おお、するとこちらの方々は、向こう側の星からやって来たという訳ですか。なるほど我らとそっくりだ！」

と、驚いて言った。そして、

「しかし、どうして地球から来たこの人達のことを信用なさるのです？ この方達は私達にない文化を持っておられる。そのおかげで、我らの生活は以前に比べて豊かになりました。そうだ、その生活ぶりをご覧にいれましょう。どうぞついてくだされ。皆さんもお疲れでしょうから一緒にこちらに」

そう言うと、兄星の族長一行は集落のある方向へ歩き始めた。もちろん二本足で。それを見て影響されたのか、自分達も二本足で歩けることを証明したかったのかは、わからないが弟星の族長と若者も二本足で歩いて後に続いた。

それを見た隊員の一人が、

「どうやら、此処が本当に自分達の星ではなく、兄星だと信じてもらえたみたいだな。それにしても、自分達の星ではあんなに嫌がっていた二足歩行を自らするとは、自分達が劣っていると思われたくないという同族に対するライバル意識なんだろうか」

と、言いながら後を追った。

しばらく歩くと集落に着いた。そこには、宇宙船のモニターで見た映像と変わらぬ光景があった。洞窟ではなく建物が建ち並び、皆が二本足で歩き、火を使って料理をしているのだ。

隊員達は、一度立ち寄って目にした光景なので気にも留めずにしたが、弟星から来た族長はというと、現実に目の前で行われている光景が未だ信じられないといった顔つきで、しばし呆然と立ち尽くしていた。若者の方は、逆に興味をそそられたようで辺りをキョロキョロと見回していた。

第9話

そして、土をこねている者に目が留ったようで、しばらくその場で眺めていたが、やおらその者の近くに行き、自分にもやらせて欲しいと言いつ出した。土をこねていた者も拒むことなく、若者に指導するように一緒になって作業を進めた。

土をこね終わると、次はその土を使って形を作り始めた。若者は呑み込みが良いのか、見よう見真似で一つの器の形を作り上げた。その作業が面白かったらしく、その次は何をするのかと兄星の者に色々と話しかけていた。

話を聞き終えたらしく、次は土が乾き固まってから火で焼くのだとわかると、元の場所に帰って来ると弟星の族長に、

「なかなか面白いですよ。族長もやられてみてはいかがですか？」と勧めた。

すると、弟星の族長は急に腹を立てたようで、

「そんなに軽々しく真似したりするでない。もし、危険なことがあつて怪我でもしたらどうするつもりだ。それに、自らの生き方に誇りを持つのが我らであるう」

そう言つたかと思うと、二本足で立っていたのを止め、弟星に居た頃のように地面に手をついてしまった。若者はシュンとなり、族長に従うように自分も二本足だけで立つのを止めて、手を地面につけた。

その様子を見ていた兄星の族長が、静かに口を開いた。

「何故、そのように地球から来た方々の文明を拒みなさるのですか？ 便利になる物、豊かになることを学び入れることは、自分達にとつても向上心と呼び起こすようになり、やがては自らの心にもやればできるのだという希望の光を宿すことになるのではないでしゅうか。決して、あなたの仰るような誇りを失うしか捨てることにはならないではないですか？」

まあ、それにすぐに決めつけることでもありますまい。少しゆつくりと我々と生活を共にして、それでもなお、あなた方の生活のが良いと思われれば向こうの星に帰ってから、今までの生活を続けければ良いし、こちらでの生活のが良いと思えたなら地球の方々の文明を受け入れれば良いではないですか」

そう言われると、弟星の族長も返す言葉が見つからないように黙ってしまった。地球から来たリーダーを始め隊員達も皆、弟星の族長の言葉に感心した。

そして、リーダーがこう言った。

「なんて素直で謙虚な心構えだろう。我々人類は宇宙に進出して久しいが、未だに我々人類を超える文明に出会っていない。

もし、彼らのように自分達を上回る文明を持つ生物に遭遇したら、どちらの星の種族のような反応を示すだろうか？

恐らく、弟星の種族に近い振舞いをするかもしれない。いや、もっと攻撃的な態度をとるだろう。何しろ、自分達が一番優れていると思っているからこうして、他の星にも進出して来ているのだから

……」

それを聞いた隊員の一人が、

「もしかしたら、弟星の種族の方がまだマシかも知れませんね。少なくとも、星全体の価値観や思想が一致している。これから、我々の文明を受け入れるにせよ、受け入れないにしても、こうして星の内では価値観や思想が一致している間は争うことはしないでしょう。

それに引き換え、我々人類は未だに国と国、或いは思想の違いからの争いを繰り返している……

こうして、他の星の生物に出会うことによって、我々人類も学ばなければならないことが多いのですね。それらを受け入れることで、我々人類も精神的な進歩を遂げて行かなくては」

その言葉に他の隊員達も黙って肯いていた。

第10話

すると、弟星の族長が、

「何！ お前達の星では仲間同士で争っているのか？ 我らの星では、そんな争いなど起こらないぞ。何しろ、私の言うことに皆が従うからな」

と、口を挟んだ。

「今はそうかも知れませんが、新しいことや自分達と違う考え方を受け入れずに排除しようとするれば、いずれは新しいことや違う考え方をする者が現れて、それに賛同する者達も増えるでしょう。」

そうなればお互いに自分達の考えが正しいと主張し合い、争いが起こるのです。現に、若者はこの星の文明に興味を示しているではありませんか。このまま此処に滞在している間にその気持ちを強く持つて、あなた達の星に帰った後にこの星での出来事を他の者達に話したら、その話に興味を抱く者も出てくることでしょう。その時になっても、あなた自身が我々の文明を拒み続けていたら、それもまたあなたを支持する者も出てくるでしょう。そうなった時に争いは起こるのです。争いが一度でも始まると止めることは難しいことなのです。

ですから、族長あなた自身も物事を先に決めつけることをせず、良いと思われることは素直に受け入れられる心の広さと、その恩恵を授かったことに対しては感謝する謙虚さが必要なですよ」

リーダーは、自らにも言い聞かせるように、そして周りの者達にも訴えるような口調で答えた。その後、しばらく間をおいてから話を続けた。

「確かに我々の住んでいる地球では、今も争いが絶えません。それは、今話したことをほとんどの者達が分かっているのですが、どちらも意地を張って悪いところや劣っているところを認めようとする謙虚さを持たず、自分達の方が正しいとか優れていると思い込もう

として、お互いの良いところを認めて受け入れようとしなないからです。

ですから、我々の悪い面まで含めた文明全てを受け入れるとは言いません。この星の方々のように、良いことを見抜く心の眼の正しさを持って、その良いと思われる事柄を受け入れるかどうかを考えてみて欲しいのです。

そうすれば、我々の悪い面の影響を受けることなく、争いのない平和で豊かな生活に進歩して行けるのではないでしょうか」

話を聞いていた弟星の族長は、何やら考え込んでいるようで返事はなかった。

それ以後この話題に触れることもなく、兄星に滞在して月日が経ち弟星の族長と若者も、兄星での食事や生活にも慣れた様子で、到着した当初の頃のように驚いたり、警戒したりすることもなくなり、族長からしてまるで兄星の住人のように振舞うようになっていた。

リーダーは、もうそろそろ良いころ合いだろうと考えて話を切り出した。

「どうでしょう、これでこちらの星にもあなた達と同じ姿をした方々が住んでいることや、我々の文明を取り入れた生活を営んでいることをおわかり頂けたでしょうか？」

「うむ、こうして目の前に見せられては十分過ぎるほどだ。認めざるを得まい。しかし、我らの星の者達がどうしているか心配でならなので、早く我らの星に帰りたい」

そう答えた弟星の族長の目には、もう疑いの色はなかった。

そこで、リーダーは弟星に戻ることを決め、隊員達にもその旨を伝えた。そして、兄星の族長に対しては、

「どうもお世話になりました。おかげで向こうの星から来た者達にも、あなた方のことをわかって貰えたようです。本当にありがとうございます。我々は、また向こうの星に彼らを連れて戻った後に地球に帰ることにします。」

もし、次に宇宙船がやって来た時は、この星と一緒に暮らすこと

を希望する者達ですのでどうぞ快く迎え入れてやってください」
そう言って、お礼と願いを述べた。

そして、弟星に戻るために宇宙船に一行は乗り込んだ。その際に、
弟星の族長と若者は自らが作成した器を数枚持ち帰ることにした。
こうして、宇宙船は弟星に向けて旅立った。

第11話（完）

弟星に戻る途中の船内で、弟星の族長がリーダーに向かって、

「お前達の文明を受け入れることで生活がどう変わるのかはこの目で見た。だが、お前達の文明を我らが受け入れるかどうかはもう少し待って貰いたい。もっと、じっくりと考えてから答えを出したいのだ」

と言うと、リーダーは予想していたかのように、

「結構ですよ。あなた方のこれからの運命を決める大事なことですからね」

そう答えた。

宇宙船は、いつしか弟星の軌道に乗り何周かした後に大気圏に突入した。そして徐々に速度を落としながら弟星の地表に着陸した。

リーダーは弟星に戻ったことを地球の基地に報告すると共に、弟星の族長が話した内容も伝えて結論が出るには時間がかかるだろうと付け加えた。

基地からの回答は、調査の任務は終了したので地球に帰還せよとのことであつた。そこで、宇宙船から族長と若者を降ろし、群れに戻ろうとする族長にこう言った。

「我々はこれから地球に帰りますが、これからも時々人の乗っていない小型の宇宙船をこの星に送ることにします。」

もし、考えがまとまって我々を受け入れてくれるならば、その宇宙船の窓に 印を付けてください。受け入れることが出来ない場合は、×印を付けてください。まだ考えがまとまらない場合は何もつけなくて結構です」

そう言い残して、彼らを見送った。

族長と若者は出発した時の地面に手をついた姿とは違って、手には兄星から持ち帰った器を持ち、二本の足でゆっくりと歩いて戻っていた。

族長達の姿が見えなくなるとリーダーは、
「我々も地球に戻ろう。帰還の準備を！」
と、隊員達に促して地球に向けて出発した。

地球に帰還したリーダーをはじめとする隊員達は、改めて兄星と弟星に関する詳細を報告した。

「兄星については、我々を入植者を快く迎え入れてくれるそうです。こちらの心配はまずないでしょう。」

弟星については、我々を受け入れるかどうかを待つて欲しいとのことでした。そこで、定期的に無人探査船を向かわせるので結論が出たら、か×を窓に書くことで返事をするように伝えておきました。こちらはその返答次第です。

ですが、どちらの星についてもまだ発展途上です。ですから、入植者については友好的な者を選り込んで送り込む必要があると思われます。」

すると、指導者と思われる者がこう言った。

「そのことは十分にわかっている。だから、これまでも文明のある星には友好的で協調性のある者達を、そうでない星には我が強く不満を抱いている者達を入植させてきたのだ。」

入植計画とは、元々この地球から争いの火種をなくそうとすること。地球で枯渇して無くなったり、或いは未知の資源を求めるという二つの目的があるのだからな。

しかし、このことは一般人に知られてはならない。何故なら、このことでまた新たな争いにならないとも限らないからだ。」

入植計画の本来の意味合いを明かされたリーダーと隊員達も深くうなずいて、決して他の者にはこのことを話さないと誓った。

一方、弟星はどうなったかというところ、幾度か無人探査船を打ち上げたが、数年経った時に打ち上げた探査船に印が見てとれたのだった。確認のために再度、探査船を打ち上げて調査すると映像に映

る皆が二足歩行をしているではないか。どうやら、兄星に習って地球の文明を受け入れるというのは本当らしい。

そこで、友好的で協調性のある者達を選ばれ、入植のために弟星に向けて旅立った。

人類は新たな入植出来そうな星を探し求めて、観測を続けている。
(完)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3905d/>

双子星

2010年10月8日15時21分発行